

## 北原白秋「この道」の一解釈

あるエスペラント訳に寄せて

Kirikae H.

26-a de julio, 2013

JASUI Josio 訳 Ĉi tiun vojon (Traduko1. 北原白秋「この道」のエスペラント訳) について感想を述べます。あわせて私の試みの訳も示しますが、まだ不完全なものです。Jasui 氏の訳詩をできるだけ生かすようにしたものです (Traduko2)。

Originalo	Traduko1	Traduko2
1 この道はいつか来た道 ああ そうだよ あかしの花が咲いてる	Ĉi tíun vójon   mi certe íris íam. Ho, jés, mi íris íam. Jen flóras ákacíoĵ,   ja sáme kíel tíam.	Ĉi tíun vójon   mi certe íris* <sup>1</sup> íam. Ho, jés, vi éstas práva. Jen flóras ákacíoĵ,* <sup>2</sup>   ja sáme kíel tíam.
2 あの丘はいつか見た丘 ああ そうだよ ほら 白い時計台だよ	Montéton tíun   mi certe vídis íam. Ho, jés, mi vídis íam. Jen blánka hórloĝtúro,   sensánĝe kíel tíam.	Montéton tíun   mi certe vídis íam. Ho, jés, vi éstas práva. Jen blánka hórloĝtúro,   sensánĝa* <sup>3</sup> kíel tíam.
3 この道はいつか* <sup>4</sup> 来た道 ああ そうだよ おかあさまと馬車で行ったよ	Ĉi tíun vójon   mi certe íris íam. Ho, jés, mi íris íam. Mi sónĝe kún patrino   kaléŝe íris tíam.	Ĉi tíun vójon* <sup>5</sup>   mi certe íris íam. Ho, jés, vi éstas práva. Ni kún patrino kára   kaléŝe íris tíam.
4 あの雲もいつか見た雲 ああ そうだよ 山査子の枝も垂れてる	Eĉ tíun núbon   mi certe vídis íam. Ho, jés, mi vídis íam. Eĉ hérboĵ dé l' kratágo   sinklíne kíel tíam.	Eĉ tíun núbon   mi certe vídis íam. Ho, jés, vi éstas práva. La bránĉoĵ dé kratágoĵ   sinklínas kíel tíam.

翻訳というのは原作者の想いを伝えるものでなければなりません。韻文でそれをするのは大変難しいことですが、せめてできるだけもとの想い（原作者が抱き、伝えたかった想い）に肉迫しつつ、かつエスペラント詩として美しいものに仕上げなければなりません。

JASUI Joŝio の翻訳の最大の欠陥は、この詩が二人の対話で構成されているということをまったく考慮していないことです。というよりも、この詩が創造したたぐいまれな時空間を考察することなく、日本語を機械的にエスペラントに置き換えた可能性が高い。文芸作品の理解に絶対ということはないから、というよりもあらゆる人文的現象に絶対の解釈ということはないから、この訳詩のとおり、白秋の「この道」が一人語り、問わず語り、あるいはつぶやきであるとしてもまったくの誤りと断定はできない。しかしそれならばこの詩の立体性がまるでなくなってしまう。

二人の対話。二人とは、三連目に「おかあさま」とありますから、仲のいいきょうだいに違いありません。ここまではほぼ確実なことです。この確かな事実からこの詩の美しさと感動が生まれるのです。

そこから、次のようなことがたぶん言えると考えます。

各連の一行目は年下の言葉。二行目、三行目を言うのは年上。仮に年下を弟とし、年上を姉とします。最初にこの道をたどったのは、もうだいぶん以前のことで、弟はまだ幼く、ぼんやりとした記憶しかない。姉はそのとき、もうしっかりしたお姉ちゃんで、はっきりとした記憶が残っている。そのときは母に連れられ三人で来たのですが、今回はもう母は亡く、成人した姉弟二人の旅です。この詩には今は亡き母を偲ぶ、という重要なモチーフが隠されていると感じられます。

そこで、姉の言葉「ああ そうだよ」を Ho, jes, mi iris iam などとするのは不可で、mi を ni にしなければなりません。

同じように第三連の Mi songe kun patrino ... の Mi も Ni となります。

次に、上述のことのほかに是非とも改訂の要のあることを述べます。

第三連の Mi songe kun patrino ... は、Mi を Ni に直したところで、繕うことができません。この姉と弟は、かつて母と三人で実際に馬車でこの道をたどったのです。馬車で行ったのは夢の中のできごとではないのです。なるほど過去は常に夢のようなもので、この詩全体も夢のようなものではありますが、馬車に揺られたのは過去の事実なのです。詩全体が夢ならば、夢という

\*1 原詩どおり vénis でもかまわないと思われませんが、iris, vénis いずれにせよ ĉi tiun vojon は akuzativo de direkto (方向を示す対格。例 *iri Parizon*) ではなく、akuzativo de trajno (経路を示す対格。例 *iri ŝtonozan vojon*) です。あえて iris とした訳詩者の気持ちを忖度するなら、原詩どおり vénis とすれば、akuzativo de direkto ととられるのではないかと恐れられたに違いありません。わたしもそのように誤解する人が多いと思いますので、訳詩者にしたがっていいのではないかと考えます。

\*2 この詩の「あかしや」はハリエンジュ（ニセアカシヤとも）。

\*3 sensang- は horlogituro の属性ですから、-e ではなく、-a にしました。-e であると staras tie などと続くことになります。

\*4 「いつは」となっているがこのように直します。

虚の世界の中の事実なのです。ですから、なんとしても songe はあってはいけません。

第四連の herboj が不可なのには議論の余地がありません。herboj は「草」です。山査子<sup>さんざし</sup>は人の丈と同じくらいな低木ですが、草ではありません。秋に黄色の実を結ぶので、その重みで枝が垂れているのでしょうか、私は見たことがありません。残念です。内地では庭木とするそうですね。

第三連

Mi sǒngē kún patrino ...

は、sǒngē をやめて、

Ni kúne kún patrino ...      あるいは、      Ni kún patrino kára...

にするのが適当と思われます。もちろん kúne より kára のほうが良いでしょう。kune kun は冗長であるし、何よりも「おかあさま」とごく上品に言っていますから、その気持ちを伝えたいものです。

第四連の

Eĉ hérboj dé l' kratágoj | sinklíne\*<sup>6</sup> kiel tiam.

は、

La bránĉoj dé kratágoj | sinklínas kiel tiam.

とすべきです。

各連が三行とも íam と押韻されています。余りにも単調です。思ってもみてください。聴き手はすべての行で、計 12 回も íam を聞かされるんですよ。原詩の構成は素朴さ、単純さを装ってはいますが、実は極めて洗練されています。このような愚かしいモノトーンとは無縁です。

脚韻は、意味に関してまったく無関係な語の最後のアクセントがある母音以下の一致となるべきです。音と意味をともに一致させるのは禁じ手です。音だけを一致させなければなりません。iam と tiam は違う語ではないか、というかもしれませんが、ともに korelativa tabelo の中の語ですから、意味的關係は大いにあります。

---

\*<sup>6</sup> sinkine にした理由は不可解です。ここは何も普通に述語にすればいいのです。

なんとかこの単調さから救い出さなければなりません。いま、余裕がなく成案はありませんが、各連二行目の姉の言葉「ああ そうだよ」を

Ho, jés, mi íris íam.      あるいは      Ho, jés, mi vídis íam.

などとせずに、白秋が歌ったとおり

Ho, jés, vi éstas práva.

とすれば、monotoneco に陥ることから多少とも救われますし、なによりうれしいことに、白秋の想いがなんの造作も作為もなくそっくり取り込めます。ただし各連の一行目と三行目がへたくそな脚韻をとどめています。

以上不完全ではありますが、私の感想といたします。